

---

# Sの彼女、Mの彼氏

美咲 愛姫

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Sの彼女、Mの彼氏

### 【Nコード】

N5932E

### 【作者名】

美咲 愛姫

### 【あらすじ】

DSな瀬良純麗【セラスミレ】、DMな百瀬誠【モモセマコト】のラブストーリー。誠のことが気になる純麗……。純麗のことが好きな誠……。二人は無事結ばれることができるのか

## プロローグ

「ねえ、いつもの買ってきてもらえる？」

「はい、純麗さん。急いで買ってきます！」

私は、瀬良 純麗。

いたって、普通の高校二年生。

DSっ気がある以外は……。

そして、今買い物に行ってくれた男は、百瀬 誠。

同じクラスのやつ。

誠は、DMっ気がある。

まあ……友達以上恋人未満っていうか……ある意味、主従関係なのかも。

## 第1話：複雑な関係

「純麗さん、はい」

ニコツと笑い、買ってきた物を差し出す。

「ありがと」

そう言い、誠からミルクティーを受け取った。

そして、ストローを袋から取り出し、ストロー口へと差し込んでいく。

ゴクン

喉を鳴らしながら、一口飲んだ。

「はい」

ストローが刺さった飲みかけのミルクティーを、誠へと差し出す。

「??」

誠は、これが何の意味なのか、わからないのかキョトンと不思議そうな顔をし、私を見てくる。

「は・い・!」

私は、意味を理解してない誠に少し腹が立ち、声を張り上げた。すると、誠は身体をビクツと痙攣させ

「ごめんなさい」と、か細い声を出し、ミルクティーを手に取る。そして、可愛らしく両手で持ち、コクコクと飲み始めた。

「プハー」

そう一息つき、誠は

「美味しかったです、このミルクティー」と満面の笑みで言い、私に返してきた。

「当たり前でしょ？私が目つけたんだから」と冷たく言い放つ。でも、それにも誠は愛想よく、私と接してくれる。

「そうですよね！純麗さんが目つけるのは、どれもいいものばかりです」

そついう誠に、たまにウツトリとしてしまう自分がある……。

「純麗さん……？純麗さん」

何故か、しきりに私の呼ぶ声が聞こえる。

「何か用？」

私は、気だるそうに問いかけた。

すると、誠は

「ごめんなさい！さつきから、呼んでも反応がなかったのとペコペコと頭を下げてくる。」

「うふふ」

そんな誠を見ていたら、可愛くて笑みをもらしてしまった。

「何かおかしいですか？！」

「うふふ」

誠をからかって遊ぶのは楽しい。

「教えてくださいよー」と答えを求めてくる誠。

「そんなの自分で考えなさいよ」とからかう私。

そうこうしてるうちに、だんだんと誠の目に涙が溜まってきた。

「ちよっ……ちよっ……。泣かないでよね！」

今にも泣きそうな誠に、動揺している自分がいる。

「ヒック、ヒック」

誠は泣きそうな顔で、私を見つめてきた。

仔犬みたいだ。

こんな顔で、見つめられては私の理性が抑えきれない……。

ギューッ、と抱きしめてあげたくなる。

でも、そのようなことはしてはいけない。

誠には、他校の彼女がいるから

## 第2話：誠からの告白

よしよし　と頭を撫でてあげた。

すると、誠は目尻をキュツと下げ、ニコツと微笑んでくる。  
そして

「僕、純麗さんに可愛がってもらえて幸せ者ですね」と呟いた。

「なーに言ってるの。誠には、彼女がいるでしょ？　そんなこと言  
っちゃ、失礼でしょ」と、釘を刺す。

「でも……」

誠は何か言いたげな様子だ。

「何？　誠は、彼女よりも私の方が好きだったり？」

意地悪な私は、意地悪な質問をする。

「僕は……姫乃ちゃんより、純麗さんが好きかもしれないです……」  
耳を澄ませていなきや、聞こえないくらいの声だった。

しかし、私にははっきりと聞こえてしまったのだ。

僕は……姫乃ちゃんより、純麗さんが好きかもしれないです  
……。純麗さんが好きかもしれないです……

何回も何回も、誠の言葉が頭の中で繰り返される。

一気に顔が赤くなるのが、自分でもわかる。

もしかして私……。

そう思っていると

「純麗さん、顔赤いですよ？大丈夫ですか？」と心配そうに、顔を  
覗きこんできた。

「あっ……うん……。全然大丈夫」

そう言い、私は席を立った。

「純麗さん、どこ行くんですかあ。僕も行きます」と言い、私の後をチヨコチヨコとついてくる。

あー、もう。何でついてくるのよ……。

ムカムカはしてはいるものの、誠がいつまでもついてきてくれるのが嬉しい。

こんな気持ちになったのは初めてだ。

それは、たぶんさっきの言葉のせいだろう。

「いつまでついてくる気？」

いつの間にか、靴箱の前までに来てしまっていた私。

だけど、誠はついてきていた。

「僕は、ずつとついて行きますよ。まあ……今から純麗さんが早退するとか言うなら無理ですけど……」と俯きながら言う。

今見る誠の姿は、とても男らしく見えた。

いつも私が見ている誠じゃない……。

「バツカじゃないの？ どこまでもついてくるとか不可能に決まってるのに……」

私は、

現実辛いもの何だ、なにかもが漫画みたいにはいかない……という現実を憎んだ。

今にも涙が出そうだった。

すると、誠が私の近くへと歩み寄り、ソツと抱きしめた。

そして

「どうして、いつも純麗さんは強がるんですか……？ 僕が、頼りない男だからですか？ それなら……僕……純麗さんを守るような男になりますから」と抱きしめながら言う。

この言葉は、今の私にとっては凄く嬉しかった。

だって……好きかもしれない誠に、告白もどきの言葉をもたらたから

いつもは、人前で……もちろん誠にでさえ、涙を見せなかった私だが、この時は涙を流してしまった。

そのことに驚いたのか誠は、どうしたらいいのかとオロオロしている様子。

「こんなことで……オロオロしてたんじゃ、私の彼氏になんか務まらないんだからっ!」

いくら泣いているとしても、誠をいじめることだけは忘れない私。何と言うドSさだ……。

我ながら驚く。

「僕は、たしかに今はまだ頼りないかもしれないけど……絶対に頼れる男になってみせますから!」と、強気のようだ。

「もう……そんなこと言うと本気にしちゃうよ? 誠も困るんだから、こういうことしないの」と言い、抱きしめている誠の手を剥がそうとする。

でも、誠は力を込め、私を離そうとしない。

そして、私の肩を両手で掴み、向き合う体勢となり

「僕は冗談なんかで言ってるわけじゃないんです。本気に純麗さんのことが好きだし、純麗さんを守ってあげたいんです!」と告白した。

本気にしちゃダメ、本気にしちゃダメ。誠には、彼女がいるんだから……。

そう自分に言い聞かせ、グツと堪えた。

誠は、返事を待っているのか何も話してはくれない。刻々と時間だけが過ぎていく……。

「グッ……ごめん!」

私は、その場にいづらくなり、誠を残して走り去っていった。



### 第3話：誠の異変

どうしよう……。どうしよう……。

逃げ出してきたしまったことに焦る私。

きっと、傷ついちゃったよね……。

そう思いながらも、どうしていいかわからず、とりあえず教室へと戻った。

教室

教室へと戻ると、誠の姿はなかった。

まだ戻ってないんだ。戻ったら、さっきのこと謝らなきゃ。

キンコンカーンコン。

授業を告げるチャイムが鳴った。

話していた生徒は、話すのを止め、どこかに行ってたらしき生徒は、戻ってき、皆が席へとついた。

でも、一つだけポツカリと空いている席がある。

私の前の席……。誠の席だ。

どうしたんだろ……。

そう思っていると、ガラツと扉が開く音がした。

誠かと思い、ハツとして扉のほうに目をやったが先生だった。

「それでは、出席をとりまーす。相田さん」

「はい」

「井上くん」

「はいはい！」

「尾田さん」

……。次々と名前が呼ばれていく。

「百瀬くん」

シーン……。

「百瀬くん、あれはないわね。朝はいたのに……。瀬良さん、知らない？」

いきなりの問いかけに、ビクリする私。

「えっ……。あつ、さっきまでは一緒にいましたけど、あとは……」

「あつ、そうなんだ……。いつも一緒に瀬良さんなら、わかんと思っただけど」

先生の言った「いつも一緒」というところが、妙に辛く感じた。

私達って、周りからはそう思われてたんだ……。

ガラッ

突然、扉が開かれ「すいません、ちょっとお腹痛くて」と、入ってくる誠の姿。

チラッと見ると、トイレで泣いたのか、少し涙目になり、目が赤かった。

席につくなり、誠は机に顔を突っ伏した。

「ねえ、誠。さっきは、いきなり逃げ出しちゃってごめんね？」

「別に……」

ボソッと呟く誠は、明らかに様子が変わる。

でも、これ以上話していると先生に怒られそうなので、帰りに話すことにした。

#### 第4話：久しぶりの再会

「それでは終わります。礼！」

「さようなら」

終礼が終わり、帰る人もいれば、掃除当番の人、部活の人もいる。

「誠、帰ろっか？」

いつもは、誠から来るのだが様子がおかしかったので、私から誘った。

まあ……いつも一緒に帰っているんだけど。

「もう僕にかまわないでください。純麗さんというと辛いです」

そう私に言い残し、教室から出て行ってしまった。

「どうしたの、純麗？ 百瀬と喧嘩でもした？」親友の小鳩 木の  
実が心配そうに、私の顔を覗きこんでくる。

「あつ、うつん！ そんなわけないじゃん？」

木の実を心配させまいと思い、つい嘘をついてしまった。

「そっかあ？ 何か……百瀬、いつもと雰囲気違ったよ？」

「ホンツトーに、全然大丈夫だから！」

いちいち、つかつかってくる木の実に、少し苛立ちを感じながらも  
平然としているそぶりを見せる。

「うーん……」

木の実は、まだ何かつかつかってくるが、私が

「ねっ？ ねっ？」

と言うと

「まあ、いつか。純麗と百瀬の問題だしね。でも、何かあったら遠  
慮なく相談してね」

と心配してくれているようだ。

「ありがと」

私は、そう言い教室を後にした。

帰り道

今まで毎日誠と登下校は一緒だった。

朝七時頃、誠が私の家まで迎えに来てくれて、帰りはやっぱり私の家まで送ってくれる。

いつの間にか、そのことが普通になっていたため、誠が隣にいないことが不快に思う。

「ああ……」

一人、溜め息を吐くと

「純麗」

と、どこから聞き覚えのある声が聞こえてきた。

「えっ……？ え」

私は、驚いてしまった。

私の前に、立っている人物……。

それは……中学の時のクラスメート、谷村 裕優だったからだ。

どれだけ必死に走ってきたのか、裕優の額には汗が浮かんでいる。

そして、久しぶりに会った私に言った一言目は

「太った？」

何この男。無神経な奴。と、思いながらも、怒れない私。

だって……中学の時、好きだった人なんだもん……。

優しい……けど、たまにキツイことを言う裕優が好きだった。

だったと過去形にはしているが、今も好きなんだと思う……。

だって、すごくドキドキしてるから……。

## 第5話…どうして……？

自分でも、顔が赤くなっているのがわかる。  
すごく熱い。

「あれ…？　もしかして、図星？」

私が、いつになっても答えないからか、当たっていると思ってしまっただらしい。

「太ってなんかないし！　むしろ、ボンツ・キュツ・ボンツに近づいてきてるんだから！」と、ついむきになってしまった。  
ジーツ、と私に向けられる視線が痛い。

いくらか経つと、裕優の視線が私の顔へと移った。  
そして、ニコーツ、と微笑んだ。

「何よ！　気持ち悪い！」

私が、言葉を吐き捨てると

「何かさ……お前……。やっぱやめた」と、最後まで教えてくれない。

「何？　そんなに私の身体、イケてなかった……？」

少々不安気味に問う。

すると、裕優は顔を赤らめ俯き

「いや。むしろ、その逆」と、ボソリと呟いた。

えっ……？　えー……！！

それって……それって、もしかしてのもしかして……。

私は、心の中で叫び、そして……一人で色々と考えてしまっていた  
今、私はどんな顔をしているんだろう。

恥ずかしがってる顔、ビクリしている顔、それとも……嬉しがってる顔？

今の私には、どれも当て嵌まる気がして、何だか恐い。

「いきなりごめんな……。ホントにごめん！」

何故だか、裕優が謝ってくる。

「えっ？ 裕優、何かあった？」

私がこういった理由は……いつも何があっても、絶対に謝らない裕優が謝ってきたからだ。

「別に何もないけど？」

そう答える裕優は、どこかおかしい気がした。

「何もないんだったら、どうして謝るの？ ねえ！」

自分から謝ることは、社会的にはいいことなのに、何故か私は自分から謝ってくる裕優を責めていた。

そして……何故か涙が溢れだしている。

「えっ、何？ 何で純麗が泣いてるの？ 俺が、変なこと言ったから？」

泣いている私を心配してくれる裕優。

自分でも、何で泣いているのかわからない。

どうして私は泣いているんだろう……。

## 第6話：初めての彼氏

ヒック、ヒック、と泣き続ける私に裕優は困っている様子だ。  
ギョッ

いきなり私を包み込むように、抱き寄せてくる裕優は少し震えている。

「純麗……。ホントにごめんな？」

「ううん、大丈夫だから……」

そう言い、私は裕優の腕から抜け出す。

ホントは、ずっとこのままで居たかった。

だけど……。そしたら自分がおかしくなってしまういそう、自分から離れた。

私は、涙を拭い、顔を上げた。

裕優はどこか悲しい顔をしている。

「ごめんね……。だけど……。裕優に抱きしめられると、ホントおかしくなりそう」

「えっ？」

何故か、裕優は驚いている。

私、何か変なこと言っちゃった……？

急に不安がつのってきた。

「ごめん。何か変なこと言った……？」

恐る恐る聞いてみる。

すると、裕優はまたも驚き「えっ？」と言い、続けて「何か勘違いしてる？」と、付け加えてきた。

えっ？勘違い？

裕優には、勘違いと言われたが全然わからない。

「いや……。俺さ、てつきり純麗が嫌がってるのかと思って」

！！！！

私、そんなに嫌がるそぶりしてた？！

ごめん、裕優。

心の中で謝った。

そして、今まで自分の心の中で秘めていた想いを、一気に打ち明けた。

「あのね、私……中学の時から裕優のことが好きだったの。高校に入ってから、忘れようと思って忘れたんだけど、今日会って、またあの時の気持ちが戻ってきちゃって……」

俯いていた顔を上げると、裕優の顔が赤かった。

しばらくの沈黙の中、最初に口を開けたのは裕優だった。

「俺も……俺も、中学の時から好きだった。今も好き」

裕優の言葉で涙腺が緩んだのか泣き出してしまふ私。

そんな私を裕優は優しく抱きしめてくれた。

私は、そんな裕優がすごく愛おしく思えて、ギューツ、と強く抱きしめた。

「裕優……私、今すごく幸せ」

「俺も」

そう言葉を、交わしながら、私達は幸せのひとときを過ごした。

「これ、俺のメアドとケー番ね！」

別れ際に、メアドとケー番が書かれた紙をもらい、私は落とさないようにと胸ポケットの中に入れた。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5932e/>

---

Sの彼女、Mの彼氏

2010年10月28日08時43分発行